

## 現代フランス語における古典語由来の人名の 音節数と語形の特徴について

今 田 良 信

本研究は、現代フランス語がラテン語の人名（但し、この中には神話・伝説上の神や妖精などの名前も含まれる）を取り入れる際に、その音節数・語形にどのような特徴が見られるかという点を中心に、資料を用いて調査・分析したものである（なお、題目を「古典語由来」としたのは、ラテン語の人名には元々ギリシア語に由来するものも多いからである）。取り扱った具体的問題は次の通り。

- (1) 語形にゆれのある人名（ex. Massicus→Massicus/Massique）の人名全体に対する割合はどのくらいか。
  - (2) フランス語に取り入れられた人名は、ラテン語と比べると発音上は大なり小なり必ず変化を被っている。一方、語形の面から見れば、ラテン語そのままの語形（forme latinisée: ex. Agis→Agis, Brūtus→Brutus）及びフランス語風の語形（forme francisée: ex. Aeneas→Énée, Augustus→Auguste）があるが、この両者の割合はどうなっているか。
  - (3) ラテン語の人名は、フランス語では音節数がどのように増減されて取り入れられているか。
  - (4) ラテン語の人名をフランス語に取り入れる際、語形はどのような変化を受けるか。
- 以上について、いくつかの結果が得られたが、それについてはここでは省略したい。詳しくは、この発表の内容を補訂し、同名の題目で『広島大学文学部紀要』第48巻（1989年）pp. 320-355に掲載した拙論をご覧ください。